

大島造船所30年小史 トピックス

1 経営理念と経営方針



表紙裏の見開きに「めざそう 小さな世界企業」と標語のような言葉が1行大きく印刷されている。その2枚あとに“経営理念と経営方針”がありその次に「発刊にあたって」という社長南尚氏の言葉が述べられている。

経営理念

- 一 世界一流の製品と世界一流のサービスを提供することにより、地域の人々に、日本の人々に、世界の人々に、豊かな生活を提供していく。
- 二 企業の社会的存在価値を深く自覚し、地球の自然環境を大切にし、それとの調和を重視する企業として生きる。
- 三 我らと我らの子孫の自由と幸福を目指し、「公平・公正・正義」を旨とし、地域・国家・世界への貢献を責務とする。

経営方針

- 一 高付加価値、高収益企業を目指す。
- 二 得意先第一主義を貫き、絶えず技術の先進性・高品質を追求し、常にオリジナリティ溢れる製品を提供する企業を目指す。
- 三 「公平・公正・正義」を判断基準・行動基準とし、「信頼」を得る企業を目指す。
- 四 個々人の「軽やかな精神と柔軟な思考」を尊重し、その自由な発想と自由な生き方が出来る企業を目指す。
- 五 個々人のバイタリティを企業全体の行動力に結びつけ、いかなる変化にも対応できる企業を目指す。

これを読んだ旧世代の造船人は多分その発想の柔軟さと表現の自由さに驚くのではないかと思う。造船会社の理念に“サービス”という言葉があること、先ず“地域”という概念があること、“我らの子孫の自由と幸福”という言葉、「公平・公正・正義」の尊重など、本当に斬新な綱領である。このページの右側に書かれている社長の発刊の挨拶と付き合わせて読むと、この柔軟な発想は多分南社長のお考えに由来するのではないかと思われるが、日本の最西端に新しい造船会社が生まれていることを感じさせる理念・方針である。この会社の豊かな成長を願わずにはいられない。

2 “地域の大義に殉じる”

大島造船所のある肥前大島は、松島炭坑が昭和45年5月に閉山になったあと地域の産業振興のための企業誘致に懸命になっていた。一方、大阪川筋の造船所であった大阪造船所は次第に大きくなる建造船に備えて新しい立地を求めていた。その両者の思いが一致して大阪造船が大島に進出することになった。



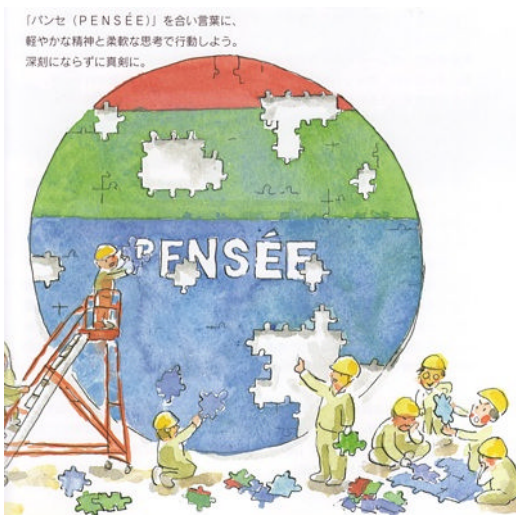
大島はわがふるさと
大島に上げれば
そこに文化がある
それが
私のめざす大島である

しかし、その道は平坦ではなかった。折から造船の設備過剰が問題となっていたので新設は簡単ではなかった。結局、住友商事、住友重機械工業との共同出資で新しい会社を作ることになった。仕事も営業は住商、設計は住重が分担する、大阪造船は専ら建造を行うという変則的な造船会社としてスタートした。しかし、地域にとっては救世主のような企業であった。また、企業側も大阪を振り切って新天地に骨を埋めるつもりでの進出であった。両者それぞれ後に引けない協力関係であったので、会社と地域の関係は、従来の造船所と地域との関係とは違った密着関係が展開された。そのことがこの小史の大きな部分を占めている。建造船の引渡式には地域の住民が参加する、会社が地域唯一の“学習塾”を設置するなど、様々なエピソードが綴られている。

そして、会社の姿勢を“地域の大義に殉じる”と表現し、その趣旨を説明している。



3 パンセせよ



「パンセ (PENSÉE)」を合い言葉に、
軽やかな精神と柔軟な思考で行動しよう。
深刻にならずに真剣に。

パンセ (PENSÉE) を
合い言葉に、
軽やかな精神と柔軟な思考で
行動しよう。
深刻にならずに真剣に。

“パンセする”とは聞き慣れない言葉であるが、南社長のしつけども言うべき方針で、“自分の頭で考えよ”ということである。パスカルの「PENSÉE」からとった言葉である。構内あちこちにこの言葉が標語として書かれているらしい。

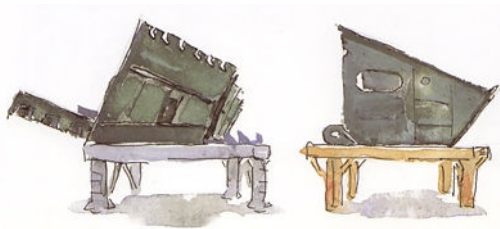
これはまた、“四考”ともいわれる、即ち志を高く（志高）自分の頭で考え（思考）それを実行に移し（試行）そして高所・理想に至る（至高）ことである、と書かれている。さながら旧制の高等学校のような造船所であるが、面白いことである。

平成16年のスローガンは「これがベストか みんなでパンセ ところ一つに さあこれからたい」である由、フランス語と長崎弁が渾然一体となっている標語も面白い。

「考えるより身体を動かせ」「下手な考え休むに似たり」というような、思考よりも行動を重視する風潮は、高品質・高付加価値、環境保全、公正・公平が尊重されるこれからの時代に相応しくないと、この会社は主張している。傾聴に値する主張ではないか。

4 バルクに特化

発足から30年の間について“後手の前半、先手の後半”という表現をしている。すなわち進出決断の47年はニクソンショックの直後であり、業界最後発の新鋭造船所建設であった。しかし、この時を外していたらその後では新設の決断には至らなかったであろう。



49年の創業開始後、間もなくタンカーの大量キャンセル窮地に陥った。その後ミニブームがあったが、直後に再不況となったが、大阪造船所の閉鎖、株主3社の犠牲により旧会社を閉鎖、新会社設立により乗り切った。昭和63年1月1日負債の重荷から解放されて新生大島造船発足、後半の15年に入った。

幸い船価も持ち直し、バルクに特化する方策が功を奏して平成2年度には当期黒字になった。救世主となったニュー47BCは平成8年11月から平成15年までの間に45隻というロングセラーになった。その後のニュー525BC, ニュー555BCも同様の連続建造で60隻の受注に至っている。この小史の中では詳細はわからないが、一点集中施策が功を奏したのであろう。量の蓄積による技術の蓄積は質の変化を引き起こす、と述べている。

5 30年後の大島

“追録”として30年後の大島がどうなっているかという夢を見せている。30年後の船を想定し、その船を大島がどうやって造っているか、楽しい夢を描いてみせる。



鉄板と樹脂のサンドイッチパネルを接着で繋いだ船体、航海中は乗組員がいない船。こんな船のうち、世界中のバルクの半分を大島が造る。年間100隻！
様々な自動化、機械化、夢の工場である。

一方 大島自体は“国際交流都市”になっていると描いている。

6 “哲学”のある社史

一般に“社史”というと過去の事実を客観的に描くというのが普通である。しかし、この小史は、歴史を描くことで未来を示そうという経営者の意図が極めてはっきり出ているユニークな社史である。そして、そこに描かれている歴史も未来も極めて“ユニーク”な会社像である。造船所の山谷の乗り越え方も旧来型のやり方が“みんなで渡ろう”式であったのに対して、“自分の頭で考えて”乗り越える。将来像も造船だけで乗り越えるのではなく会社と地域をどう保全発展させればよいかという観点で考えられている。そして、そこには“地域と共に生きる”“社員個々人の尊重”“自分の頭で考える”という経営者の思想がはっきり織り込まれている。その意味でこの小史は“哲学のある社史”と言えるのではなからうか。

この会社が“30年後の大島”に描かれているように、あくまでも“造船”に軸足を置いた多彩な事業展開で発展すれば、韓国や中国も恐れるに足らずと言うのは言い過ぎだろうか。